

第5部

次の100年へ

- 第1章 創立百周年記念式典と記念事業
- 第2章 今後百年の礎を築き、未来を拓く
- 第3章 新たな人工知能基盤技術
- 第4章 理論科学の新しい地平に向けて
- 第5章 ニホニウムの発見から、次なる元素へ

理研100年の研究成果《理研科学者会議96選》

財団理研の大河内正敏所長は、研究テーマ、予算、人事の裁量権を主任研究員に持たせ、研究者の自由な創意を育む環境を作り上げた。また、研究成果を実用化するために理研産業団を形成した。これらの伝統は今後も受け継がれていく。これからの時代、「知識」と「人」が社会発展の源泉になると考えられる。地球規模の課題解決の先にどのような社会を目指すのか、何のためのイノベーションか、思索を深めて具体的な研究課題を創出していかねばならない。

第1章

創立百周年記念式典と記念事業

式典第一部

理化学研究所は、1917（大正6）年に学問の力によって産業の発展を図り、国運の発展を期する使命をもって、科学研究と応用研究を行う財団法人として創設された。その後、株式会社、特殊法人、独立行政法人、国立研究開発法人と変遷を重ねつつ、100年を経過した。

2017（平成29）年4月26日、東京国際フォーラムにおいて創立百周年記念式典が開催された。来賓と理研役員が壇上に揃い、会場の和やかなざわめきが消えて緊張感が満ちる中、天皇皇后両陛下がご着席されて、式典の第一部が始まった。



天皇皇后両陛下

松本洋一郎理事の開会の辞の後、松本紘理事長が式辞を述べ、続いてご来賓の松野博一文部科学大臣、鶴保庸介内閣府特命担当大臣（科学技術政策）、マーティン・シュトラットマン マックスプランク協会会長、内山田竹志日本経済団体連合会副会長・トヨタ自動車株式会社代表取締役会長よりご祝辞をいただいた（別掲）。

松野大臣は、理研が2016年10月に特定国立研究開発法人に指定されたことに触れた上、「今後、理研が我が国のイノベーションを牽引していくことに期待し、文部科学省としても支援していく」と述べられた。鶴保大臣は、国が進めるSociety 5.0という取り組みのためのAI研究拠点を理研に設置したことを紹介された後、「理研が人類に豊かさをもたらす、世界的中核研究機関として発展してほしい」と期待を述べられた。

シュトラットマン会長は、マックスプランク協会が理研とほぼ同時期に設立されたこと、連携研究センターの設立をはじめ、緊密な研究協力を30年以上にわたって続けてきたことを述べられ、100周年への祝意を表された。

内山田副会長は、これからの100年には地球規模の課題が山積しており、それらの解決と、豊かで活力ある未来社会の創造のためには科学技術の力を結集したイノベーションが必要であるとし、経団連が政府と連携して取り組むSociety 5.0を核に、理研との協力を深化させたいと述べられた。

祝辞に通底していたのは、国が「イノベーション立国」を目指す中で、理研がより優れた研究成果を挙げ、それを実用化につなげることへの強い期待であった。



式典の様子

理化学研究所創立百周年記念式典

式 辞

国立研究開発法人理化学研究所理事長 松本 紘



松本理研理事長

本日ここに、天皇皇后両陛下の御臨席を仰ぎ、来賓各位の御列席の下、理化学研究所創立百周年記念式典を挙行いたしますことは、理化学研究所として最も光栄とするところであります。

さて、理化学研究所は、大正6年、1917年3月、渋沢栄一翁、高峰譲吉博士らの提唱により、皇室からの御下賜金、政府の補助金、民間寄付金を基に、財団法人として設立されました。当時、我が国は、明治維新を成し遂げ、欧米の列強に伍する豊かで強い国にならんと、自らの手で追いつき追い越すべく、科学技術の必要性が高まった時期であります。

そこで我が国最初の純正理化学研究所として、「我国の産業の発展に資すること」を目的に理研は設立されました。伏見宮貞愛（ふしみのみや さだなる）親王殿下を初代総裁に奉戴し、数学者の菊池大麓博士を初代所長として研究を開始致しました。

以来、時代の要請に応えながら組織形態を変えつつ、常に我が国を代表する自然科学の総合研究所として、幅広い分野で先導的な研究を進めて参りました。昨年10月からは、特定国立研究開発法人に指定されております。

さて、理研の特徴は、第三代所長の大河内正敏博士の時代に確立したと言えます。主任研究員に研究テーマ、予算、人事の裁量権を持たせ、研究者の自由な創意を育む環境を作り上げました。一方、基礎研究を根幹としながらもその研究成果を我が国産業の発展に役立てていくことが理研の責務であるとの認識の下、理研産業団も形成致しました。この考え方は、「理研精神」として今に受け継がれています。

さらに昭和60年代前半には、我が国の研究機関では初めて、外部の優れた研究者を任期制により採用して、限られた期間に計画的に研究に取り組む「戦略研究センター」を設置し、脳科学やゲノム科学などを推進して参りました。また、技術開発の成果をもとに、仁科博士由来のサイクロトロンや大型放射光施設SPring-8、スーパーコンピュータ「京」などの大型装置を自らの手で開発し、国内外の研究者の利用に供するなど、先駆的な取り組みを行って参りました。

近年では、世界で初めてiPS細胞を使った目の治療の臨床研究や新元素ニホニウムの発見など数々の研究成果を挙げております。それと同時に、若手研究者を育成するとともに、多くの研究リーダーを輩出して参りました。

現在、国と連携し、安定して研究するための人事制度改革や大学等との連携を強化する科学技術ハブ機能の確立など研究所運営上の先進的な取り組みを進めております。

これからの時代、「知識」と「人」が社会発展の源泉となると考えております。それ故に、地球規模の課題解決の先にどのような社会を目指すのか、何のためのイノベーションか、といった問題を深く洞察するイノベーションデザイナーを置き、具体的な研究テーマを創出して参ります。さらに、基礎研究の成果を速やかに社会に還元する新たな仕組みを作りたいと考えております。

最後に、本日御臨席賜りました天皇皇后両陛下並びにご出席の皆様方に深甚なる感謝を申し上げるとともに、今後、理研は百年先を見据え、大きなビジョンと至高の科学力をもって、「研究開発成果の最大化」を図り、豊かな国民生活の実現や国際社会の発展に貢献することをここにお願い申し上げてご挨拶と致します。

平成29年4月26日

祝 辞

文部科学大臣 松野博一

この度、理化学研究所創立百周年記念式典が、天皇、皇后両陛下の御臨席を賜り、多くの関係の皆様の御出席の下、このように盛大に行われますことを、心からお慶び申し上げます。

理化学研究所は1917年、学問の力によって産業の発展を図ることを目的に、皇室から頂いた御下賜金、民間からの寄付金などを基に創設されました。その後百年にわたり、創設時の精神を受け継ぎ、優れた研究者の発想に基づく、世界的な研究成果を世に送り出すとともに、成果の社会還元や産業の発展への貢献に尽力されてきました。

近年では、新元素である113番元素の合成に成功し、元素周期表に「ニホニウム」という名が刻まれ、世界に理化学研究所の存在感を示しました。

また、ライフサイエンスやAIといった、各界からの要請が高い研究開発、スーパーコンピュータ「京」などの世界最高水準の研究基盤の構築や運営に取り組まれるなど、幅広い分野の先導的な取組を進められてきております。

昨年十月には、特定国立研究開発法人に指定されました。このことは、これまでの実績が改めて認められたことの現れですが、同時に、世界最高水準の研究開発を行い、我が国のイノベーションを牽引していくという、理化学研究所に対する今後の期待が強く込められたものです。

理化学研究所が、次なる百年においても、更に躍進し、科学技術や産業の発展、我が国や広く人類の繁栄に貢献していけるよう、文部科学省としても一層支援してまいります。

結びに、各界の皆様の御支援や御尽力に感謝申し上げますとともに、理化学研究所の皆様の更なる御活躍を祈念し、私の祝辞とさせていただきます。



松野文部科学大臣

平成29年4月26日

祝 辞

内閣府特命担当大臣（科学技術政策） 鶴保庸介



鶴保内閣府特命担当大臣（科学技術政策）

本日、ここに、理化学研究所創立百周年記念式典が、天皇皇后両陛下の御臨席を仰ぎ、来賓各位の御列席のもと、盛大に行われますことは、誠に同慶の至りに堪えません。

関係者の皆さま方のご尽力に、心から敬意を表します。

理化学研究所は、大正六年、産業発展に貢献する科学研究を行うため、皇室からの御下賜金や民間の寄付金などを基に創立されました。

世界初のビタミンAの抽出とその製品化など科学技術史に残る成果をあげ、豊かな国民生活や産業の発展を支えてきました。

最近も、世界初のiPS細胞を用いた臨床手術、新元素「nihonium（ニホニウム）」の合成、世界最高性能を誇るスーパーコンピュータ「京」による新薬や新素材の開発など、枚挙にいとまがないほどの成功を取っています。

また昨年10月には、特定国立研究開発法人に指定され、我が国のイノベーションを牽引する世界最高水準の研究機関として、世界に先駆けた成果を生み出し続け、その成果を社会に届ける責務が、益々大きくなっています。

我が国は、サイバー空間と実世界の融合により人類に豊かさがもたらされる未来の姿「Society 5.0」を国際社会に提起し、産業界もあげて、官民ともに様々な取組を進めています。

この一連の取組の成功こそが、アベノミクス・成長戦略の鍵といえ、政府の戦略のもと、「Society 5.0」の実現に不可欠な人工知能の国際研究拠点が、昨年理化学研究所に設置されたところです。

「Society 5.0」の実現には研究投資の拡大が不可欠です。

このため、今年21日の総合科学技術・イノベーション会議において、官民あわせた研究投資の拡大に向け、政府投資の目標である対GDP比1%を達成する具体的な道筋を決定しました。

これまでがそうであったように次なる百年においても、理化学研究所の全職員が一体となり、人類に豊かさをもたらす科学研究の国際的な中核機関として、未来を果敢に切り拓かれていかれることを心より祈念いたしまして、私のお祝いの言葉に代えさせていただきます。

平成29年4月26日

祝 辞

マックスプランク協会 マーティン・シュトラットマン会長

Their Majesties the Emperor and Empress, Excellencies, distinguished guests, colleagues, and ladies and gentlemen:

It is an extraordinary honor for me today to be celebrating RIKEN's Centennial with you. The Max Planck Society sees itself as part of a global network of cutting-edge research organizations. We feel connected to many partners all around the world. However, our relationship with RIKEN is certainly unparalleled: we have been close collaborators for more than 30 years now. This alone tells a remarkable story of trust and shared values. Moreover, both of our orga-



シュトラットマン マックスプランク協会会長

nizations were founded around the same time and built on the same beliefs: Basic research – driven by the intrinsic curiosity of the greatest minds to solve the mysteries of nature and the world surrounding us – is the key to long-lasting prosperity, and to social and economic progress for each of our countries, and ultimately, for humanity on the whole.

Now we are standing here, 100 years later, and this tells me that we both did something right. RIKEN and the Max Planck Society still attract the greatest minds – and we are particularly successful whenever we do this together. Our Max Planck-RIKEN Joint Center for Systems Chemical Biology bears witness to this. It is a best practice example in various respects: First and foremost for complementing research interests and approaches, but also for scientific excellence and a vivid exchange of ideas and talents.

Ladies and Gentlemen, I can assure you: RIKEN will remain a much sought-after partner for us and a close friend in the decades to come. Please accept my warmest congratulations, also on behalf of my colleagues in Germany, on your 100th anniversary, and allow me to extend my sincere thanks to you for the fruitful and trusting collaboration of the past 30 years.

Prof. Dr. Martin Stratmann, President Max Planck Society

【日本語訳】

御臨席の天皇皇后両陛下、ご来賓の方々、ご参加の皆様

本日、理研創立百周年を皆様とお祝いすることができ、大変光栄に存じます。マックスプランク協会は、最先端研究機関の世界的ネットワークの一員であると認識しており、世界中の数多くのパートナーとの結びつきは我々にとって大切なものです。しかしながら、そのパートナーの中で理研は特別な地位にあります。我々は、三十年以上にわたる緊密な協力を続けて参りました。このような関係を三十年間続けることができたのは、際立った信頼関係と共通の価値観があったからです。さらに、両機関はほぼ同時期に設立され、同じ信念に立脚しています。その信念とは、すなわち、我々を取り巻く自然と世界の謎を解き明かしたいという、偉大な科学者たちの生来の好奇心につき動かされた基礎研究こそが、両国にとっての、究極的には人類全体にとっての、長く続く繁栄そして社会的・経済的な発展の鍵であるということです。

そして百年後の今、我々がここにいるということは、我々がともに正しい道を歩んできたことを示しています。理研とマックスプランク協会は今も優れた科学者たちを惹きつけ、それが最も成功するのは私たちが力を合わせた時です。我々のシステムズケミカルバイオロジー分野におけるマックスプランク-理研連携研究センターはその良い例です。まず、研究上の関心と手法が相補的であること、そして、科学的な卓越性、アイデアと才能の活発な交換といった様々な観点で、最良の実践例です。

皆様、私は次のことを確信します。理研はマックスプランク協会にとって、将来にわたって、最も必要とされるパートナー、そして親しい友人であり続けるでしょう。ドイツにいる同僚たちを代表し、これまで三十年間にわたる実り多き、信頼に満ちた協力関係への感謝とともに、理研創立百周年を心からお慶び申し上げます。

マックスプランク協会 マーティン・シュトラットマン会長

2017年4月26日

祝 辞 日本経済団体連合会副会長 内山田竹志



内山田経済団体連合会副会長

経団連の内山田でございます。このような栄えある場にお招き頂き、誠にありがとうございます。

本日、理化学研究所が天皇后陛下ご臨席のもと、かくも盛大なかたちで創立100周年を迎えられますこと、まずもって心よりお慶び申し上げます。

理研におかれましては、1917年の創設以来、今日までの100年間にわたり、わが国のサイエンスを牽引してこられました。これまでの数々の功績に対し、産業界を代表して深

い敬意と感謝を申し上げたいと思います。

これからの100年間を展望することは容易なことではありませんが、地球規模の課題が山積するなか、それらの解決と、豊かで活力ある未来社会の創造が、極めて重要となるものと存じます。こうした時代を切り拓くためには、人類の英知である科学技術の力をこれまで以上に結集し、更なるイノベーションを生み出していくことが必要です。現在、われわれ産業界を中心に、狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く第5段階の社会をSociety 5.0と称し、その実現に向けて政府とともに幅広い連携に努めております。理研におかれましても、そうした新しい経済社会の実現に向け、様々なかたちで協力を深化させていただければと思っております。

本日の式典が、理研の次の新しい100年のスタートとなり、今後ますます発展されることを期待しております。

本日は誠にめでとうございます。

ご清聴、誠にありがとうございました。

平成29年4月26日

式典第二部

天皇・皇后両陛下が、会場の拍手に送られて退席された後、式典は第二部へと移った。第二部の冒頭では、100年の歴史を約7分間にまとめた映像『理化学研究所創立百周年記念映像』が上映され、ついで、松本理事長が「今後百年の礎を築き、未来を拓く」と題して講演を行った。

松本理事長は、理研の強みとして、1. 大学にない大型の施設・設備、2. 研究室の規模が大きく、長期大型プロジェクトが可能、3. 事務職員が優秀、4. 学際領域の研究開発を行いやすい環境、をあげた上で、今後、理研が進めるべき四つの改革について述べた。

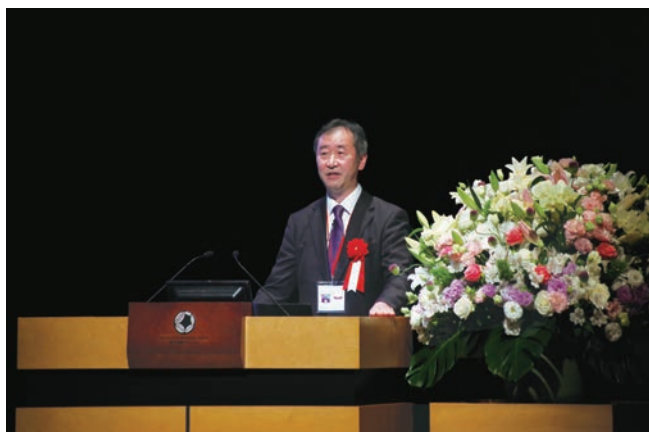
一つ目は、人事制度改革で、研究者の雇用の安定性と流動性を両立するとともに、若手の研究者の自由な発想を育てる仕組みを強化するとした。二つ目は財務改革で、財団理研の時代に理研が理研コンツェルンから多大な収入を得ていたことを紹介し、産学協働体制を強めて運営費交付金だけに頼らない経営をめざすとした。三つ目は研究員の意識改革で、研究者一人ひとりが何のために研究するのかを真剣に考え、科学の進歩と世界の繁栄のために研究するという意識を醸成することをめざすとした。さらにわが国のイノベーションに資するために、「Science for Future Society」という視点で研究を進めるとの決意を表明した。

その上に、100年後に実用化が期待される技術を上げ、それに貢献できる研究成果を理研がすでに挙げつつあることを示す一方、100年のスパンを持った視点で研究者一人ひとりが研究を進めることを誓った（この講演内容全文は次の第2章の中に掲載）。

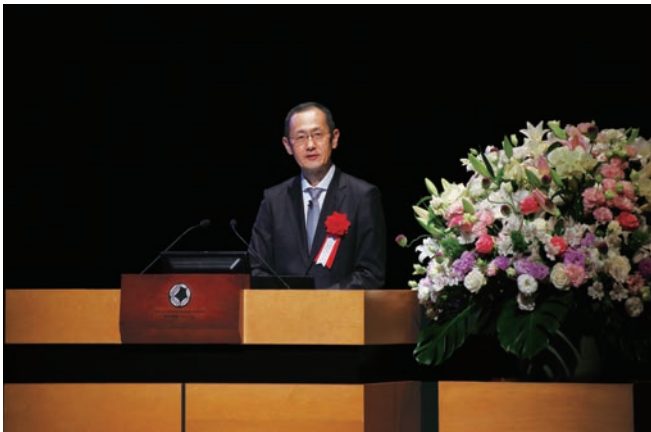
続いて、二人のノーベル賞受賞者、梶田隆章東京大学宇宙線研究所所長・特別荣誉教授と、山中伸弥京都大学iPS研究所所長・教授による記念講演が行われた。

梶田教授は、戦前、仁科芳雄研究室では、ミューオンを中心に世界でも最高水準の観測と先端的な理論研究が行われたことを紹介され、理研は、日本の宇宙線研究の発祥の地であるとたたえられた。現在の大きな研究トピックとして、大気ニュートリノ、ガンマ線、高エネルギー宇宙線、重力波をあげ、観測プロジェクトや理論研究において理研の果たす役割への期待を述べられた。

講演の冒頭と最後に、1942（昭和17）年に制作された理研記録映画『科学の殿堂』で大河内正敏所長が語った「理研は純正物理学、純正化学の研究をするのが目的であり、同時に、医学、農学、工学といった応用研究もするが、そちらに主力を置くと研究が次第に退歩するので、どこまでも純正理化学の総合的研究に力を注ぐ」（要約）という言葉を紹介され、この言葉への共感を示すとともに、こ



梶田東京大学宇宙線研究所所長



山中京都大学iPS研究所所長

の精神で理研の基礎研究が今後も発展することを願うと話された。

山中教授は、iPS細胞（人工多能性幹細胞）をつくるための遺伝子を、理研のFANTOMデータベースを利用することで迅速に絞り込むことができたこと、まず振り返られた。続いて、iPS細胞の特徴として、簡単に増やせたことと、さまざまな細胞に変化させられることを挙げ、この特徴を生かして、再生医療と医薬品開発の2通りの応用が進んでいることを報告された。

再生医療では、2014（平成26）年に、理研が世界のトップを切って患者由来のiPS細胞からつくった網膜細胞による加齢黄斑変性の臨床研究に成功しており、医薬品開発では、iPS研究所で樹立した疾患特異的iPS細胞が理研を通じて国内外に配布されているなど、iPS研究所と理研が密接な関係にあり、今後もその関係を深めてiPS細胞の実用化を目指したいと語られた。

その後、松本理事の閉会の辞で、式典は終了した。この式典には、多くの国会議員のほか、文部科学省、内閣府、関係自治体、国内外研究機関、各国大使館、理研の関係機関、理研の関係企業などから合わせて約600名の方々が出席された。

創立百周年記念交流会

式典の後、会場をホールB7に移して、「理化学研究所と親しむ会」（以下、親しむ会）と理研の共催で交流会が開かれた。親しむ会は、理研にゆかりのある企



天皇皇后両陛下、理研百周年記念展示をご見学

天皇皇后両陛下は、創立百周年記念式典に先立ち、年表や研究成果などの展示をご覧になられた。松本理事長からアジアで初めて命名権を得て「ニホニウム」と名付けられた113番元素の研究をはじめ、理研の代表的な研究成果などについてご説明を受けられると、天皇陛下は「すいぶんいい成果を上げていますね」と述べられた。



展示をご覧になる天皇皇后両陛下。右は説明をする松本理研理事長

業が集まって1987（昭和62）年に設立され、理研と産業界の連携強化のための取り組みを行っている。大河内正敏所長が理研の発明の事業化のために設立した企業群（理研コンツェルン）から、近年、理研と連携するようになった企業まで、会員は約114社にのぼる。理研の研究者と企業の研究開発担当者の交流を目的として、例年2月に産業界との交流会を開催しているが、今回は理研百周年を記念して、式典当日に盛大な交流会を開いた。

親しむ会の桜井正光会長（株式会社リコー特別顧問）のご挨拶の後、自由民主党科学技術・イノベーション戦略調査会長の渡海紀三朗衆議院議員、前会長の塩谷立衆議院議員が祝辞を述べられた。続いて、松本理事長、式典の来賓（松野大臣、鶴保大臣、シュトラットマン会長、梶田教授）、理研の3名の元理事長（有馬朗人氏、小林俊一氏、野依良治氏）、親しむ会役員などによる鏡開きが行われ、山東昭子参議院議員の発声で参加者一同が乾杯した。さらに、松野大臣、鶴保大臣の祝辞があり、歓談の後、理研の小谷元子理事の挨拶、親しむ会の塚美保副会長（理研ビタミン株式会社代表取締役会長）の閉会挨拶で幕を閉じた。

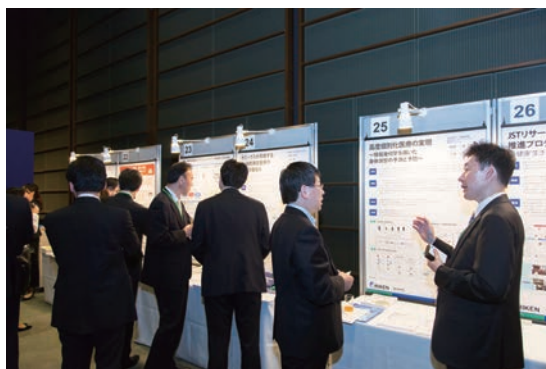
式典の招待客のほとんどが交流会にも参加され、理研の今後の100年を応援され、その成果に期待を寄せられていることが感じられた。会場の壁面には、理研のさまざまな研究成果を紹介するポスターが34枚掲示され、研究者が企業からの来場者に熱心に説明していた。会場のいたるところで歓談の輪ができ、華やかな祝賀ムードと熱気の中、招待客は理研との交流を深められた。



開会の挨拶をされる「親しむ会」桜井会長



鏡開きの様子



パネル展示の様子



会場風景

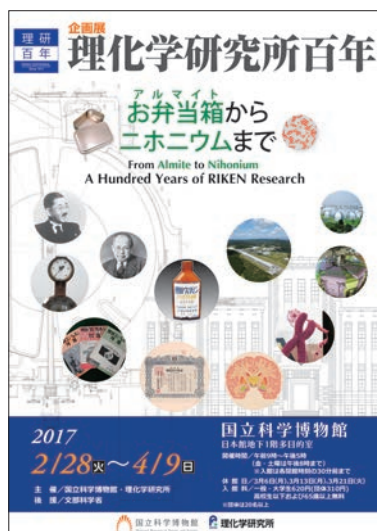
創立百周年記念事業等

理化学研究所は、次なる100年においても、社会から信頼され、かけがえのない研究所であり続けるため、記念式典のほかに、百年展の開催など、さまざまな事業、行事を行い、地域との連携を深めている。

百年展の開催

理研創立百周年を記念して、上野の国立科学博物館と企画展「理化学研究所百年 お弁当箱からニホニウムまで」を共催した。

今回の展示では、理研設立、偉大な先人たち、財団理研、(株)科学研究所、和光移転、理研が生み出した製品、現在の研究や研究設備、新しい100年へ、と理研の100年の歩みを展示品とともにタイムラインに沿ってたどる構成とし、また、113番元素「ニホニウム」原子核模型との写真撮影コーナーも設置した。併せて記念講演も開催した。



理研百年展ポスター



国立科学博物館（上野）での企画展「理化学研究所百年」

それぞれ、時期、地域が異なるが同じような百年展を、次のように開催している。

国立科学博物館（上野）：2017年2月28日-4月9日

和光市民文化センター：2017年5月30日-6月6日

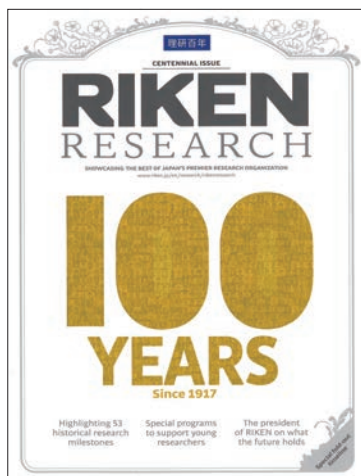
神戸市立青少年科学館：2017年7月20日-8月23日

里庄町・仁科会館（岡山県）：2017年9月16日-11月5日

科学史に刻まれた理研の歩みを保存・編纂し、展示・伝承する。

- RIKEN Research Centennial Issue、2017年3月24日発刊（国際部により作成された英文の季刊誌RIKEN Researchの百周年記念号）。
- 講談社ブルーバックス『理化学研究所 100年目の巨大研究機関』（山根一眞著、

2017年3月14日刊行) 制作に理研が全面協力。



○理研の歴史講演会の開催

先人たちが築いてきた理研の歴史等について、講演会を10回開催し、講演内容を講演集にまとめた。

○百年タイムカプセルの設置・展示

歴史的に価値ある資料を収集・保存しアーカイブ化するとともに、百年タイムカプセルに収容し、後世に伝える。参加は企業と理研の各研究センター等。



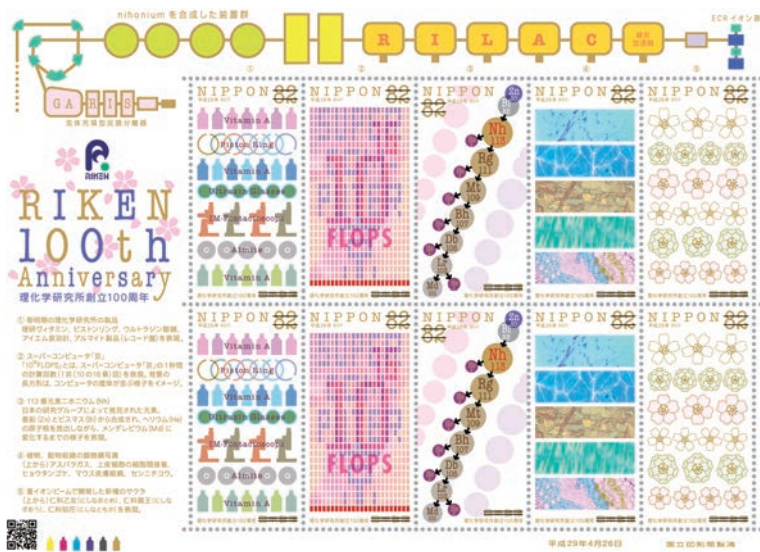
「科学道100冊」で紹介された本100冊を贈呈

理研と編集工学研究所は、科学者の生き方・考え方や科学の面白さ、深さ、広さを伝えるため、分かりやすく親しみを持てる科学の本100冊を選書した。

その一環として、そこで紹介されている100冊の本を、先進的な理数系教育による創造性豊かな人材育成に取り組んでいる国内のスーパーサイエンスハイスクール (SSH) に贈呈した (195校)。



科学道100冊のパンフレット

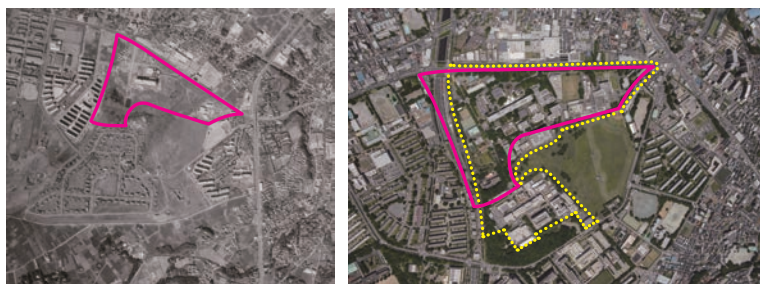


この切手シートは、理研創立百周年記念式典が行われる2017年4月26日に合わせて、同日から全国の郵便局などで発売された。

特殊切手「理化学研究所創立100周年」が発行される。

日本郵便株式会社が発行する特殊切手に、「理化学研究所創立100周年」が選ばれた。周年記念切手は年数種類の発行であり、一機関の周年事業が採用されるのはまれとのこと。

モチーフになったのは写真の左から順に、①黎明期の理研の製品、②スーパーコンピュータ「京」、③113番元素ニホニウム (Nh)、④植物、動物組織の顕微鏡写真、⑤重イオンビームで開発した新種のサクラの五つ。



左が1967年当時、右（黄点線）が現在の理研和光地区

その他

① 和光移転50周年とニホニウム通り

理研の創立百周年の2017年は、奇しくも、理研が創立時の東京・駒込から現在の和光市へ移転しての50周年でもある。

6月7日、和光地区で和光移転50周年記念式典が開催された。

移転当時の建物は、数棟だったが、現在は敷地も広くなり、立ち並ぶ研究棟は50を超える。

6月24日には、和光市主催でニホニウム通り記念イベントが開催され、市内の小学生たちが、市民投票で愛称「ニホニウム通り」と名付けられた和光市駅から理研までの1.1kmの歩道を歩いた。



ニホニウム合成・発見記念碑は、英語版が理研和光に設置され、日本語版は和光市に寄贈され和光市駅前に設置された。



ニホニウム通りのスタート地点となる水素のプレート

ニホニウム通りには、原子番号1番（水素）から113番（ニホニウム）までの元素記号入りプレート113枚が埋設される。

② BSI 20周年記念シンポジウム開催

2016年12月10日、コクヨホールにて、理研百周年と脳科学総合研究センター (BSI) 20周年を記念するシンポジウム「脳科学と社会の未来」が行われた。

利根川進BSIセンター長により、初代センター長伊藤正男の尽力により設立さ



集合写真

れたBSIが、2代目センター長甘利俊一のもとで国際的な地位を確立し、3代目センター長利根川が進めた改革を経て、世界の脳科学をリードする研究機関へと成長した歴史が述べられ、続いて活発な議論が行われた。

③ SPring-8供用開始20周年記念式典を開催

2017年10月13日、姫路城（兵庫県姫路市）にて、SPring-8供用開始20周年記念式典を開催した。

松本紘理研理事長の主催者挨拶では、関係者の方々への感謝の意を表するとともに今後の決意を述べた。また、ご来賓の石見利勝姫路市長、中川敦史SPring-8ユーザー協体会長、土肥義治高輝度光科学研究センター理事長、佐野太文部科学省科学技術・学術政策局長、井戸敏三兵庫県知事、大宮英明三菱重工業株式会社取締役会長、フランシスコ・セッテ欧州シンクロトン放射光研究所（ESRF）所長から祝辞を頂戴し、SPring-8やSACLAへの今後の期待も寄せられた。

会場では、式典のために作成されたプロジェクションマッピング（左）や、SPring-8の建設当時からこれまでの歩みをまとめた歴史映像（右）も上映された。





和光市とのきずな

理研の新たな研究拠点建設のうえで、和光市（移転当時は大和町）は最適の土地であった。

都心への交通の便が良く、何よりもそれまでの拠点である駒込から近い。研究用に不可欠の良質な水が豊富にあること等の条件を満たしている武蔵野台地の一角に、27.2ヘクタール（東京ドーム5.8個分）の広大な敷地を確保できたのである。

1962年に本決まり、1967年に建設が完了し移転している。しかし、その間、地元との関係が順調に推移していたわけではない。

新天地の研究施設の目玉としての第4号サイクロトロン建設が住民にとって不安視されたのである。サイクロトロンは戦前の理研で原子核物理学の研究のために建設されたのであるが、敗戦とともに米軍によって「原爆研究につながる」と誤解され、破壊されて海洋投棄されていた。

建設に当たって町議会でも放射能漏れ、爆発の危険性が指摘された。そのため、理研は説明会を開催して「サイクロトロンはあくまで実験施設であり、原子爆弾ではない。放射能の心配もこれだけの施設であれば絶対はない」と説明した。実際にサイクロトロンは十二分の厚みのコンクリートの壁で覆われた建物に収容され、外部に放射線が漏れ出す懸念はまずない。町民の不安もようやく収まったのである。

以後は一貫して理研と和光市は友好な関係が持続されている。その後に建設された線形加速器RILACからは、ニホニウムの発見の朗報がもたらされるとともに、松本武洋和光市長は、ニホニウム通りの設置など、「ニホニウムのまち和光」としてシティプロモーションを推進している。

毎年春に理研構内のサクラ並木が一般に公開される日には、近在の家族連れなどがのんびり散策し、広大な敷地に目を見張る。年に一度の研究活動の一般公開日には、地元の小中高生がパネル展示や実物に目を輝かせ、若い研究員からの説明に熱心に耳を傾ける。

「科学のまち」はさらに多くの人たちを、科学の高みへといざなうインキュベーターとしての役割を果たしていきそうだ。



理研の成果を和光市が広くPRする横断幕。理研に隣接する国道歩道橋に掲げられた。